

月岡芳年の錦絵校合摺 ——「月四十八集」ほか

岩切 友里子 (立命館大学衣笠総合研究機構客員協力研究員)

要旨

山中古洞「芳年伝備考」、石井研堂「芳年の画風変遷」は、明治6年の芳年の傑作として「名所月四十八景」という作品を挙げているが、古洞が見たのは完成した錦絵ではなく、校合摺であった。当時、石井研堂が所蔵していたというこの校合摺については、図が紹介されたこともなく、その後の所在も不明で、どのような作品であったのか、長い間の疑問であった。この度、筆者は、これに関連した「月四十八集」と題する校合摺の存在を知る僥倖を得た。芳年の画業空白期間の希少な作例を示すものであり、代表作「月百姿」との関連も窺え、芳年の埋もれた画業を知る上で重要な意義を持つ。また、一緒に保存されていた他の校合摺にも、出版された錦絵としては未見の図があり、ここに報告をしておきたい。

abstract

Meisho Tsuki Shijūhakkei (Forty-eight Views with the Moon at the Famous Places) by Tsukioka Yoshitoshi in 1873 is reported in Yamanaka Kodō, *Yoshitoshi-den bikō* and Ishii Kendō, *Yoshitoshi no gafū no henshen*. However Yamanaka Kodō noted that *Meisho Tsuki Shijūhakkei* owned by Ishii Kendō was not a nishiki-e, but a key-block print. The image of this key-block print has not been introduced and its location was not certain afterwards.

Recently, I had the opportunity of seeing the key-block prints titled *Tsuki Shijūhasshuū (Forty-eight Views with the Moon)*. Those are rare works indicating Yoshitoshi's activities in his blank period of the work in 1873. I think that *Tsuki Shijūhasshuū* have relation to his best-known work, *One Hundred Aspects of the Moon*. In addition to this, I note some another key-block prints that had been stored together.

1 「月四十八集」

山中古洞「芳年伝備考」は、芳年の画業に関する基本的文献である。第6稿(『浮世絵志』23号、1930)では、明治5年末から6年にかけて、芳年が強度の神経衰弱に祟られたため、明治5年の錦絵は「一魁随筆」だけであったとし、明治6年の作のひとつとして「名所月四十八景」を挙げ、以下のように記している。

「名所月四十八景」は、石井研堂先生の激賞措かざる傑作である。私もお宅で無色の校正刷を拝見して敬服した一人であるが、扨此画が世に出たものであるかを疑ふのです。

この校合摺を所蔵していた石井研堂は、「芳年の画風変遷」(『錦絵』36号、1921)において、次のように記す。

今日の蒐集家は、芳年の「月百姿」を代表的傑作のように言ふてゐるが、予は其真意が分らない、成程「月百姿」は、其彫刻も印刷も、好いには違ひ無いが、画としての価値は、寧ろ明治6年に出版した名所月四十八景の方が、幾ら好いか知れない、船頭の裾を風に吹かせて涼味済幅の月下の涼船大川尻の大船の月など、何れも「百姿」中に、見られない上出来である。

しかしながら、山中古洞がその出版を疑っている

ように、「名所月四十八景」という題の錦絵は、現在まで確認されていない。石井研堂の評価も所蔵していた校合摺によったもので、校合摺まで作られていたが、何らかの事情で、錦絵の完成には至らなかったと考えるのが妥当であろう。

この度、筆者が知見を得た2図の校合摺には「月四十八集」の題があり、落款の「月岡芳年」の形態は、明治5～6年の改印のある「一魁随筆」と共通しており、同じ頃の作画と見られ、明治6年12月出版の錦絵で「大蘇」号を用いる以前の制作であることは間違いない。

今回、報告する「月四十八集」は、山中古洞、石井研堂が挙げている題「名所月四十八景」とは異なる。また、前掲の石井研堂の文からは、その題材は風俗画であったように思われるのに対し、「月四十八集」の題材は武者絵に分類される題材である。同じ頃に「名所月四十八景」と「月四十八集」という、2種の揃物の校合摺が作られていたことになるが、どちらかが先に構想され、まもなく題名と題材が変更された可能性も考えられる。いずれにしても、「月四十八集」はこれまで、全く報告されていなかった校合摺ということになる。

2図ともに、細目題、画中の人物の名標、版元名が入る部分は未刻であるが、描かれている画題は図様によって明らかである。

1.1 矢矧の橋 (図1)

副題・人物名は未刻。柱にもたれて眠る子供。槍を手にした頭巾の男を先頭に、龕灯を持った男たちがさしかかる。こうした設定で描かれるのは、『絵本太閤記』に伝えられる岡崎の橋（錦絵では、矢矧の橋とするのが一般的である）での、日吉丸と蜂須賀小六との出会いの場面である。小六が橋の上で寝ていた日吉丸を蹴って通り過ぎようとしたところ、日吉丸は目を覚まして怒り、礼をなして通るべしと言う。幼い者の豪胆さに驚いた小六は無礼を謝し、日吉丸を家に伴い帰る。

太閤記関連の絵を出版することは、文化元年（1804）以降、禁じられていたが、芳年の師である歌川国芳が人物名をさまざまに変えてこの画題を扱っている。芳年自身も、「美談武者八景 矢矧



図1 「月四十八集」矢矧の橋 青裳堂書店蔵

の落雁」(明治元年・大判三枚続)、「豊臣昇進録」(明治元年頃・大判三枚続)を描いている。

揃物名が「月四十八集」なので、本図の細目題は「矢矧の月」といったようなもので、背景には皓々と照る満月を色板のみで表す構想であったものと推考される。欄干のない土橋のような橋としているようで、施されている色指しは色名の表記がないが、代赭など茶系のものではなかろうか。

本校合摺で注目されるのは、デッサンを元にしたものと見られる日吉丸の写実的な描写と小六たちの陰影を施された西洋画的な表現である。ここにおいて、芳年の画風は、明治5年以前の作とは全く異なるものに变化している。

また、本校合摺を利用したと見られる、芳年の弟子、山崎年信の作品がある。大判三枚続「太閤実記雪月花之内 矢矧之月」(図2)である。右図などは、殆ど敷き写したものと見られ、果たして芳年がこの校合摺を利用することに許可を与えたのかどうか疑問が残る。

この年信の作には「彫工平三」「明治十二年二月廿四日御届」「画工 山崎忠二 東京浅草富阪町卅二パンチ」「出板人 心才バシ二丁目 池田伝兵エ」「南久太良町 摺榮梓」とあり、東



図2 山崎年信 「太閤実記雪月花之内 矢矧の月」 個人蔵

京の年信の作が大阪で出版されたことになる。

年信は、明治10年の西南戦争の錦絵によって本格的に浮世絵師としての活動を始めているが、明治11年12月の「古今名誉美談集」、大日本優名鏡」、明治12年1月の「日本略史図」などは、全て大阪で出版されたものである。なぜ、東京で出版しなかったのでしょうか。

明治13年、年信は大阪に下り、「魁新聞」の挿絵を手がけたが、まもなく東京に戻り、明治15年末に仮名垣魯文の仲介によって以前の不義理について芳年に詫言を入れたという（中村茂生「山崎年信略伝」、『浮世絵芸術』168号・2014年）。この不義理が具体的に何を指すのかは不明とされているが、芳年が年信を許して家に入れた3日目に、年信は「芳年翁が二〇年来新図を工夫し諸物を写生し丹精根気を尽されし漫画の草稿四〇余枚」（『いろは新聞』明治16年2月9日）を持って出奔したため、芳年が年信搜索願いを新聞に掲載するという事件があった。年信が芳年に詫言を入れたという「以前の不義理」とは、「月四十八集」の本図を写して大坂で出版したことだったのではなかろうか。

1.2 山中鹿之助幸盛（図3）

副題・人物名は未刻。兜を脱いで、手を合わせて何事かを祈る武将。従者の持つ兜には、三日月

の前立が描かれている。この図様から、月を信仰し、尼子家再興に奮闘した山中鹿之助を描いたものとわかる。幸盛が月に祈る姿は、嘉永期に師の歌川国芳が「太平記英勇伝 尼中鹿之助幸盛」として描いている。芳年自身も明治16年に「芳年武者无類 山中鹿之助幸盛」（図4）を描いているが、これは、本校合摺の構想に類似しており、山上の満月が描かれている。校合摺の色指しは「こ



図3 「月四十八集」山中鹿之助幸盛 青裳堂書店蔵



図4 「芳年武者无類 山中鹿之助幸盛」 国立国会図書館蔵

いべに(濃紅)」である。月は色板のみで表されるものだったのであろう。明治19年の「月百姿 信仰の三日月 幸盛」では、画中に月を描かず、鑑賞者の背後に月を感じとらせるという特異な画想が用いられている。

「月四十八集」が何図、制作されていたのか不明であるが、後年の大作「月百姿」に本図のように同じ題材が採られていることは興味深い。

明治5年末から6年初めの芳年の錦絵の出版は「一魁随筆」13図が知られるのみである。「月四十八集」及び「名所月四十八景」は、校合摺まで出来ていながら、芳年の病気によって色指しなどの作業が滞り、未出版のまま放置されてしまったものかもしれない。

版元は、彫り残されている矩形の位置と大きさから、「一魁随筆」を出版した政田屋平吉であった可能性がある。明治6年4月、5月の改印のある榊原健吉撃剣会を描いた4種の作も全て政田屋の出版になる(署名は「魁斎芳年」)。

明治6年12月の改印のある「三河後風土記之内 大樹寺御難戦之図」と真田幸村が家康に迫る図の2種の大判三枚続(ともに丸鉄版)では、「大蘇」の号が初めて用いられており、翌7年以降は、順調な作画活動が続く。

「月四十八集」はこの明治5～6年の空白期間における、芳年の画風刷新の過程を示す貴重な資料である。また、月をテーマとして、当世風俗ではなく過去の題材を描くという構想は、「月百姿」に共通するもので、芳年が「月四十八集」の構想をあたためて転生させたのが「月百姿」であったと見ることもできるよう。

2 その他の校合摺

「月四十八集」とともに、保存されていた校合摺の細目を表に付す。

これらの図の完成した錦絵も、現在の時点では確認されていない。

- ・ 明治11年4月御届の「皇都会席別品競」シリーズ(小林鉄次郎版)は、これまでに、21図が知られているが、残されている校合摺によって、当初予定されていたシリーズ全体の構想により近付くことができる。
- ・ 明治9年10月と明治10年1月御届がある「情得感檀形」は役者絵のシリーズ。錦絵は14図が確認されていたが、この校合摺によって、五代目坂東彦三郎は3図が描かれていたことがわかる。
- ・ 明治11年御届の「本朝智仁英勇鑑」(森本順三郎版)は、出版錦絵が13図確認されている。明治14年御届の「皇国廿四功 佐藤四郎兵衛忠信」(図8・津田源七版)の構想は、本校合摺(図7)に類似する。

ご協力を賜りましたご所蔵家の方々に、感謝を申し上げます。

〔附記〕

『アートリサーチ』16号、拙稿「ARC所蔵芳年校合摺について」において、p.22に挙げたarcUP5712～5714 題名未刻(渡辺綱、禁札を賜る)について、完成した錦絵は、未確認と記したが、その後、完成した錦絵を確認した。右図に「頼光四天王」の題がある。また、紙面を借りて、拙著『芳年』(平凡社・2014年)の作品目録の役者絵に、文久3年3月「遠藤武者盛遠 河原崎権十郎」(角金版 彫初)の追記をお願いしたい。

その他の校合摺（全て青裳堂書店蔵）

	題名	御届	版元	署名	備考
1	皇都会席別品競 鳥越町 八百善	明治11年 4月2日御届	小林鉄次郎	応需芳年 補筆年雪	芸者名は未刻。「たいしや」と「にく」の色ざし2点。
2	皇都会席別品競 今戸 有明楼	明治11年 4月2日御届	小林鉄次郎	応需芳年 補筆年雪	芸者名は未刻。1枚に「きがちたいしや」「むら」の色ざし。
3	皇都会席別品競 日本橋 大萬	明治11年 4月2日御届	小林鉄次郎	応需芳年 補筆年重	芸者名「さかいや小すみ」・「武蔵屋駒吉」。色指しはあるが、色名は書されていない。【図5】
4	皇都会席別品競 浅草 瓢亭	明治11年 4月2日御届	小林鉄次郎	応需芳年 補筆年雪	芸者名は未刻。色ざしはあるが、色名は書されていない。【図6】
5	情得感檀形 入る日 坂東彦三郎 平相国清盛	明治9年10月7日 御届	大倉孫兵衛	応需よしとし筆	彫銀次郎。【図9】
6	本朝智仁英勇鑑 佐藤四郎忠信	未刻	未刻	大蘇芳年	「たいしや」と「うす紅」の色ざし2点。【図7】。既出版錦絵は明治11年御届、森本順三郎版
7	（忠義水滸伝）	未刻	未刻	魁斎筆・一魁	大判に9図。人物名・題名は未刻。鼓上蚤時遷ほか。既出版錦絵「忠義水滸伝」は万孫（大倉孫兵衛）版。
8	於城山隆盛最期酒宴図	明治10年10月御届	松崎留吉	応需大蘇芳年	松崎留吉刀。大判三枚続の内2図。
9	大日本文名伝	なし	なし	応需大蘇芳年	明治11年頃。大判三枚続。色ざしはあるが、色名は書されていない。明治11年5月御届の大判三枚続「日本武名伝」（福田熊次郎版）と対になる。
10	後醍醐天皇 准后	明治11年12月御届	廣瀬辰五郎	月岡米三郎	大判三枚続の左図か。「米三郎」は「米二郎」の誤刻。



図5 「皇都会席別品競 日本橋 大萬」青裳堂書店蔵



図6 「皇都会席別品競 浅草 瓢亭」青裳堂書店蔵



図7 「本朝智仁英勇鑑 佐藤四郎忠信」 青裳堂書店蔵



図8 「皇国廿四功 佐藤四郎兵衛忠信」 個人蔵



図9 「情得感憧形 入る日 坂東彦三郎 平相国清盛」 青裳堂書店蔵